

集団の中で個（どの子も）鍛える 実践を通して

学力研 塩田 真奈美

形だけの集団

集団とは、一般に複数の人の集合であり、単に個人が集まるというよりは、ある特定の複数の人間が相互作用し一つの機能的単位となるとき、集団と言えらるという。

学校で学び合う小集団(クラス)の中で、相互作用できるような集団としての交わりを成立させるために、どのような取り組みが重要視されるのだろうか。

現状では相互作用が依存するような群がりの方が強くなっていないか気になります。子どもたちの座席についても、一体感が出るような集団座席(コの字型)をすすめる傾向もあります。グループでの協同的学び合いを行うための環境を整える一つの手段であるはずが、「それがいい」と提唱されれば、流行に流されてしまう風潮にあります。アクティブラーニングも本質的な捉え

方を間違えれば、質のない形だけの集団になる恐れがあります。

何を取り入れるにしても、子どもたちの実態に合わせて、今一度、冷静に教師が立ち止まって問うべきことだと私自身思うのです。

子どもの心を探る

先月、クラスで席替えをするため班長会議を子どもたちだけで行いました。内容は座席の配置についてであり、驚いたことに、コの字の座席やグループのままの座席にすっかり慣れているはずの子どもたちが、黒板を正面に向いた一斉型の座席を配置図にしたのです。なぜなのか問いかけた所、理由が明らかになりました。

- ①視線を合わせることに集中できない。
- ②板書しにくい。
- ③つついししゃべってしまう。

という意見が、クラスの過半数を占める結果となり座席の雰囲気が一変しましたが、何ら違和感を感じませんでした。不思議なことになりきたのです。教師の意図することに、子どもたちがどれほど価値を見出せているか。子どもに問うことで確認する必要があると実感した次第です。

自分は、今どの位置にいる？

(シーソーが揺れ動き始めるには・・・)、みなさんはシーソーの図を見てどのよう感じますか？片方は、誰かに身も任せ、誰かの力で軽くなっているのかも知れませんが、もう片方は、誰かのためにも自分が我慢しているのか？それとも、誰かのために力になろうと頑張りすぎているのか。子どもたちは自分の内面と向き合い、対話していく中であることに気づきました。シーソーの支点である位置がどうも気になるというのです。その位置とは、普段話を聴いているように実は聴いていないフリをしているような人に見える。学習を理解しているように全くわかっていないことに気づいていない人なのか、関心を寄せていないようにも思える。



↑これは、つまり無関心な

状態と言えるのでないだろうか。と話し合いが深まりました。自分自身をふり返り、互いの現状を知った上で、具体的にどうすればよいのか。良きアドバイスをグループで共有させた後、特定の活躍する子の発言

に思いやりが見られ、少しずつ中間層と呼ばれる子どもたちが、自分の意見を述べるようになったのです。これを機に授業づくりを見直すことにしました。

知らない世界を創る

まず、集団の中で個を鍛えるために、「話すこと」を取り上げ、どの子にも身につけさせたいと考えました。そのためには、話すという行為の積み重ねを意図的にさせる「しかけ」が必要です。手始めに何からすればよいか迷いましたが、学力研に行くところもヒントをもらい閃きが湧いてきます。今回は、漢字の学習を実践することにしました。一斉授業でこちらの問いかけ(発問)に答える授業スタイルを止め、相手つまり

友だちに問う質問を考え、学んでいく方法です。一つの質問から語彙をどんどん付け足しながら変化させ、受け答えしていくプロセスで思考力を高めます。最初は、簡単な質問に、答えられることで自信をつけていきました。慣れてくると、難題を考える問題づくりにチャレンジする意欲が湧き、その後、子どもたちがとった必然的な行為は何だと思えますか？

それは自分も知らないことを学ぼうとする探求心から見出された自主学習ノートの予習||調べ学習に至ったのです。これもしや「予習を科学する」ということにつながるのではないかと。久保先生の名言に実践が一步近づいた瞬間でありました。それ以後、漢字の練習帳は単なる視写ノートではなく、自分で質問したい熟語の意味調べや漢字の由来を書くことを加えた自分の記憶に残るノート作りに変容を遂げたのです。**一斉授業とグループ学習の両輪**
一斉授業で定着した漢字の学習を、今度はグループ内で、一人ひとりが協力し質問を出し合い、新出漢字の書き込みを完成させていきました。早く完成したグループに

はテスト問題づくりに挑戦させ、ノートに自分が新出漢字で作った文章を書いていく取り組みを行っています。次の日の朝学で国語大臣がグループの問題を学級全体に公表し仮テストを行います。本テストまでにいかに漢字の熟語を正しく獲得しているか、漢字は、評価が目に見えてわかることで、苦手とする子の頑張りや、素直に共感でき、何とも言えない心地よさを味わう良さがあるので、グループでの活動にびったりです。でも、これは一斉授業でしっかりと基礎を築いたからこそ成しえたことだと実感します。一斉授業で学習を進めると、いかにグループでの活動が、依存的な話し合いになつていたのか見えてきた課題があります。一見、画期的なグループでの学び合い活動でも、「誰かが助けてくれる、誰かが発言してくれる、グループに聴けば、わかる」といった馴れ合い関係の中ではないけません。グループ学習は、質の高い深い学び合いを協同的にすることを目指しています。子どもの実態に合った見極めた実践の良い所をうまく活用していくことが改めて大事なと思う。